

平成29年度 「Special プロジェクト 2020（特別支援学校等を  
活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」

## 委託業務成果報告書

鳥取県教育委員会

## 1 事業目的

特別支援学校の在校生及び卒業生、地域住民等が、障がいのあるなしに関わらずスポーツの楽しさを共に味わうとともに、体力の向上や豊かな生活の実現、共生社会の実現を目指す。

## 2 事業の必要性

### (1) 鳥取県の現状と課題

鳥取県の状況としては、以下のような状況であり、本事業を活用し、障がいのある児童生徒及び卒業生が地域の中で生涯にわたって、運動やスポーツを楽しむことができる仕組みづくりを推進することとした。

- ・特別支援学校在学中における部活動等は、ほとんどの学校で実施されているが卒業後に、卒業生が活動する受け皿となる場が十分ではなく、運動機会が減少する傾向にある。
  - ・地域にある施設が、障がいのある方が活用しにくい場合がある。(例：車いすの卒業生にとっては、学校のトイレは安心)
  - ・特別支援学校児童生徒が地域にどのような運動・スポーツに親しむ場があるかを知らないケースがある。
  - ・運動の場への移動、送迎や施設の利用が難しいケースがある。
- 以上のことから、本事業を活用し、

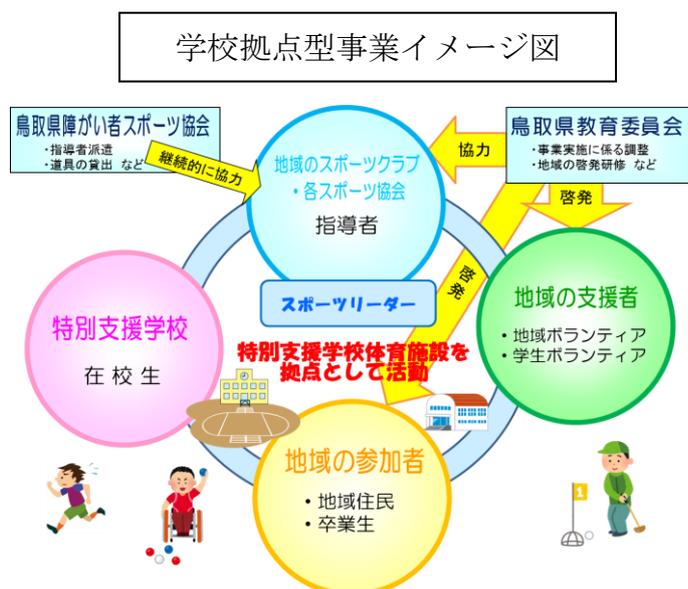
## 3 事業概要

県内の共生社会実現に向けた理解啓発を進めるため、事業名を「鳥取発！スポーツでつながる共生社会充実事業」とし、「学校拠点型」と「地域参加型」の取組を行った。

### (1) 学校拠点型事業

設備が整備され児童生徒や卒業生の親しみのある場所である特別支援学校の体育館を活用し、地域のスポーツ団体等が中心となり、地域を巻き込んだスポーツ活動の場を企画・運営し、持続したスポーツ活動ができる仕組み作りを行った。

拠点として県内3校をモデル校とし、次のスポーツ団体等と協力しながら事業を実施した。



○学校拠点型事業モデル校とスポーツ団体等

モデル校	スポーツ団体等	スポーツ団体等概要
県立 倉吉養護学校	一般社団法人 山陰リンクの会	モデル校がある鳥取県中部の総合型地域スポーツクラブ。スポーツリーダーを依頼した杉谷哲治氏は、モデル校の社会人講師を務めており、障がいのある児者に対する理解がある。
県立 皆生養護学校	医療法人 養和会	障がい児・者向けのメディカルフィットネスセンター「CHAX (チャックス)」を運営する医療法人。スポーツリーダーを依頼した石丸知氏は理学療法士であり、障がい者スポーツ指導員の資格を有している。
県立 米子養護学校	フレンズけんべい スポーツクラブ	スポーツリーダーを依頼した佐藤直也氏はモデル校の保護者であり、PTA活動の中核を担っている。同クラブは、モデル校在校生や卒業生が休日にスポーツを楽しむために活動している。

(2) 地域参加型事業

特別支援学校の生徒が、卒業後に居住地のスポーツクラブに参加することができることを目的として、特別支援学校生徒や保護者に、地域のスポーツクラブの存在を知ってもらうための取組と、生徒とスポーツクラブの指導員とが出会う場を設定する取組を行った。

学校とスポーツクラブとの橋渡しは、地域のスポーツクラブをつなぐコーディネーター（公益財団法人鳥取県体育協会が総合型地域スポーツクラブをコーディネートしているクラブアドバイザー）に依頼し、教育委員会が学校とクラブアドバイザーとの調整を行った。

平成29年度は、全県から生徒が入学する琴の浦高等特別支援学校をモデル校として事業を実施した。

#### 4 学校拠点型事業の取組

##### (1) 鳥取県教育委員会の取組

スポーツリーダー決定後、年間にわたり次の取組を行った。

- ・スポーツリーダーとの打合せや情報提供
- ・報道への資料提供及び取材対応
- ・特別支援学校運動・スポーツ推進協議会（県内特別支援学校対象）や県教育委員会の広報誌（県内小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等対象）での各学校への周知

##### (2) 県立倉吉養護学校を拠点とした取組

一般社団法人山陰リンクの会代表の杉谷哲治氏にスポーツリーダーを依頼して取組を進めた。総合型地域スポーツクラブとして活動しており、活動内容については地域の方も参加して楽しむことができる内容が中心となった。

モデル校の社会人講師を務めている関係で、学校との連携がとれており、事業のチラシを学校から配布してもらう等の連携や打合せを行っていた。

活動の様子としては、地域でグランドゴルフをされている方が多く、障がいのあるなしに関わらず、参加者同士声をかけあいながら、和気あいあいと活動が進められていた。

倉吉養護学校生徒や卒業生にとっても、仲間が多く、また、地域の方の温かい声かけもあり、安心して参加できる雰囲気となっていた。

2月にはインフルエンザの影響で中止になることもあったが、おおむね予定どおり実施することができた。

平成28年度からの事業であり、学校生徒や地域住民にとっても知られるようになってきており、地域の小学校からの参加も見られる。本年度の在校生、卒業生、地域住民等の参加者数は、昨年度の2倍程度となってきた。

また、地域住民にもスポーツをとおして、障がいのある方とスポーツに取り組むことの良さや意義が浸透してきた。

開催日	主な内容	参加者
7月8日	フロアグランドゴルフ	35名（内：障がい児・者18名）
9月19日	フロアグランドゴルフ	33名（内：障がい児・者15名）
11月11日	フロアグランドゴルフ	28名（内：障がい児・者13名）
12月9日	フロアグランドゴルフ	26名（内：障がい児・者11名）
1月13日	ヒップホップダンス	25名（内：障がい児・者7名）
3月3日	フロアグラウンドゴルフ	35名（内：障がい児・者15名）

### (3) 県立皆生養護学校を拠点とした取組

医療法人養和会メディカルフィットネスセンターCHAX主任の石丸知氏にスポーツリーダーを依頼して取組を進めた。

モデル校は肢体不自由と病弱の特別支援学校であるため、石丸氏には理学療法士の視点から、ストレッチや障がい特性に合わせたプログラムの立案及び実施をお願いした。

障がい者スポーツ指導員の視点から、レクリエーションからスポーツへステップアップするプログラムを組んでおり、参加者の実態にあった活動内容の設定がなされていた。実際に本事業の取組をとおして、参加者が皆生スポーツ広場を飛び出して、各種障がい者スポーツ大会の出場へ移行につながるケースも見られた。

本事業では、スタッフとして皆生養護学校の卒業生が運営として参加しており、運営と参加者が一体となって活動に取り組むことができた。また、取組内容も道具づくりから活動を始めたり、パラアスリートとの出会いの場の設定をしたりするなど工夫して事業に取り組んでいた。

参加者にとって、特別支援学校体育館は慣れ親しんだ環境でもあり、安心して活動に取り組むことができていた。特に、肢体不自由のある参加者にとって、慣れないトイレの使用が心配である場合が多く、学校を活用することで安心感が増していた。

開催日	主な内容	参加者
7月22日	だるまさんが転んだ、リレー、鬼ごっこ、等	21名（内：障がい児・者7、障がいのある運営スタッフ2名）
8月19日	車椅子サッカー	20名（内：障がい児・者6名、障がいのある運営スタッフ2名）
9月16日	車椅子サッカー	23名（内：障がい児・者8名、障がいのある運営スタッフ3名）
10月21日	車椅子サッカー	20名（内：障がい児・者9名、障がいのある運営スタッフ3名）
11月25日	ボッチャ	26名（内：障がい児・者13名、障がいのある運営スタッフ2名）
1月27日	ボッチャ	10名（内：障がい児・者3名、障がいのある運営スタッフ0名）
2月24日	ボッチャ	18名（内：障がい児・者5名、障がいのある運営スタッフ1名）

#### (4) 県立米子養護学校を拠点とした取組

モデル校の保護者、佐藤直也氏にスポーツリーダーを依頼して取組を進めた。

保護者が中心の団体であり、モデル校は知的障がい特別支援学校であることから、活動内容については参加者にとってルールを理解がしやすく、かつ、全員で取組みやすい活動の設定が必要であり、地域のスポーツ指導者の支援を受けながら取り組んだ。

活動内容は、モデル校の在校生、卒業生、保護者が交流を行うことができる貴重な場となっており、モデル校の同窓会との連携を行い、参加者の募集も行っていた。

参加者からは、次回開催を楽しみにする声が聞かれた。

開催日	主な内容	参加者
10月15日	風船バレーボール	26名（内：障がい児9名）
11月19日	ボールを使った運動等	6名（内：障がい児1名）
1月28日	風船バレーボール等	27名（内：障がい児10名）
2月11日	風船バレーボール等	16名（内：障がい児4名）

#### 5 地域参加型事業の取組

地域参加型では、県内唯一の高等特別支援学校である琴の浦高等特別支援学校をモデル校として、特別支援学校の卒業生と地域総合型スポーツクラブとのつながることを目的として事業に取り組んだ。

初めての場への参加に不安を感じる生徒が多く、また、スポーツクラブの存在を知らない生徒もいることから、卒業後に安心してスポーツクラブ等に参加することができるようにするために、スポーツクラブ指導員等が特別支援学校に出向き、体験会を行った。

体験会の後には、生徒にアンケートをとり、スポーツクラブに興味があるという生徒を対象にして、スポーツクラブの説明会を行った。その際には、生徒の居住地に近いスポーツクラブの指導員に来てもらった。

また、鳥取県においては、交通網の整備状況が都市部とは異なり、運動、スポーツの場への移動には保護者の協力が必要になるケースが多いことから、前述のスポーツクラブの出前授業を学校の参観週間に実施したり、スポーツクラブの説明会の対象を保護者も対象としたりした。

各担任レベルにおいても、卒業後に向けた移行支援会議等において、運動スポーツの大切さを保護者へ伝え、チラシの配布等も行った。

## 体験会、説明会等の開催状況

実施日	主な内容	参加者
10月2日	担当者事業打合せ	クラブアドバイザー 琴の浦高等特別支援学校担当者 教育委員会担当者
11月29日	地域総合型スポーツクラブの体験会の開催	琴の浦高等特別支援学校高等部3年生 スポーツクラブ2団体
12月13日	地域総合型スポーツクラブの体験会の開催	琴の浦高等特別支援学校高等部3年生 スポーツクラブ2団体
2月26日	生徒向けスポーツクラブの説明会	スポーツクラブ4団体 生徒7名、保護者3名

## 6 成果と課題

### (1) 学校拠点型事業

#### 【成果】

- ・モデル校の児童生徒及び卒業生を中心に、運動やスポーツを楽しむことができる場が形成されつつあり、参加者が大幅に増えた団体もあった。
- ・地域からの理解も深まってきており、スポーツをとおして、障がいの有無に関わらず、対等に関わり合う雰囲気ができてきている。
- ・様々な競技が体験でき、ステップアップするプログラムを取り入れた団体もあり、特別支援学校体育施設での活動が、各種大会に参加するなど、参加者の運動スポーツの意欲向上へとつながるケースもあった。

#### 【課題】

- ・卒業生、在校生の運動スポーツの場への移動手段の確保が昔いケースがあると考えられ、課題である。
- ・運営基盤が弱いスポーツ団体もあり、事業終了後に継続して取り組むための資金確保の方法を県として検討する必要がある。
- ・学校、地域への周知が不十分で取組を広く知ってもらう必要がある。

### (2) 地域参加型事業

#### 【成果】

- ・11月、12月の地域スポーツクラブの体験会をとおして、地域のスポーツクラブの存在を知って興味を持った生徒が7名おり、説明会に参加した。
- ・保護者も、地域に地域スポーツクラブがあることを知ることができ、3名の保護者が子どもと一緒に説明会に参加した。
- ・2名の生徒が卒業後に地域のスポーツクラブで活動をする方向となった。
- ・体験会や説明会に参加したスポーツクラブの中には、当初は地域のスポーツクラブでは障がいのある方の受け入れは難しいと考えていたクラブもあったが、特別支援

学校生徒と実際に活動する中で、地域のスポーツクラブでみんなと一緒に活動することができる生徒が多くいることに気付いてもらうことができ、啓発へと繋がった。

**【課題】**

- ・生徒や保護者は地域のスポーツクラブを活用する意欲は示しているが、地域のスポーツクラブが障がい者の受け入れをしていない場合や、地域に障がい者の受け入れをしているスポーツクラブがあっても、生徒が活動したいスポーツ等を提供していない場合などがあり、地域のスポーツクラブへの啓発等も併せて行うことが必要である。
- ・モデル校の取組を県内の他の特別支援学校、特別支援学級等へ広めていくことが必要である。